

この秋は
学びの種を
見つけに行こう！

府中市生涯学習センター

生涯学習 だより

第81号

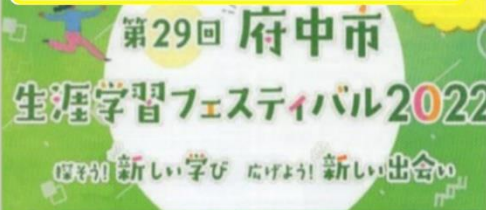
2022年10月1日 発行

秋号

P1 学びの窓口 様々な講座



P2 生涯学習フェスティバルの様子



P3 インタビュー 市史編さん担当 英さん



P4 郷土の森博物館散策



市民ギャラリー



《今月の作品》 『積み木の動物園』
絵画サークル「基礎」の提供作品から

学びのきっかけは講座にあり！

学びを始めようと思った時、一番手っ取り早いのは、興味をひかれた講座に参加することです。

幸い府中には、いろいろな講座を提供している施設があります。

生涯学習センター（SGC＝①）では3か月ごとに「教養・生活実技」や「スポーツ」の様々な定期講座を設け募集しています。11月には新年から3か月間の受講募集が始まりますので、一度チェックしてみてください。

各大学でもオープン講座が多く提供され、東京外国語大学（外大＝②）の語学講座や、東京農工大学（農工大＝③）の「公開講座」が人気です。気楽に参加できる講座が多く設けられています。

＜各施設・講座のホームページ＞

① SGC



② 外大



③ 農工大



④ いきプラ



⑤ 市民塾



⑥ 出前講座



健康に関心のある方にはいきいきプラザ（いきプラ＝④）の講座がお勧め。シニア（65歳以上）向けにいろいろな健康講座が開かれています。ストレッチや筋トレのポイントを丁寧に教えてくれます。スタッフも気軽に声をかけやすく、3か月の定期講座と1日だけの講座など、気になる講座が満載です。

意外に知られていないところでは、「TAMA 市民塾」（市民塾＝⑤）があります。この塾は、生涯学習をテーマに、府中だけでなく広く多摩地区の市民のみなさんがボランティアで運営しています。講師も多摩地区に在住、在勤、在学している方がつとめます。

このほか、学びたい人達のグループには、市職員が出向して講話する「ふちゅうカレッジ出前講座」⑥などもあり、少し探してみると案外好みのもの・講座に出会い、学びのチャンスになるかもしれません。

企画・編集：府中市生涯学習ボランティア「悠学の会」

共同発行：府中市文化スポーツ部文化生涯学習課

ふちゅう生涯学習センター共同事業体

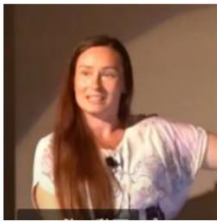


去る9月10・11日、第29回府中市生涯学習フェスティバル2022が、3年ぶりにリアルで開催されました。ビデオがWEBで公開されていますのでご覧ください(右参照)。それに先立ち、4日には「特別講演会」が行われ、NPO法人府中観光協会のアニカ・ゴデックさんが『運命の町 Where I Call Home ～ポーランド人女性が見た府中～』と題したお話をされました。ここでは、その様子をお伝えします。



<WEBで公開中>

ポーランド南端の田舎町出身のアニカさん。府中が大好きで、Instagramで府中の情報を世界に発信しています。



ふるさとの町はウクライナに近いので、今回の戦争でウクライナからの避難民が最初に来たとのことでした。

講演は、2012年に初めて日本に来て神戸の幼稚園で英語を教えたり、ボランティアで全国の農家を手伝ったりしながら1年間で帰国。どうしても日本が忘れられず、改めて2017年に府中市立小中学校の外国語指導助手として再来日。以来、府中市がますます好きになって府中で暮らすことにした、との話から始まりました。

学校で教えているときは、ポーランドに比べると、日本の子供たちは塾や習い事などで本当に詰まった生活をしているなあと思ったり、みんなで学校をきれいにされているなあと感じたりして、ますます府中で働きたいと思うようになっていったそうです。

そんな時に、ラグビーワールドカップ2019や東京オリンピックパラリンピック2020があり、外国人観光客のための通訳や府中の魅力をInstagramで海外に発信するなど、市役所の仕事

につけることになり、本当にラッキーだった。府中市のPRに関する仕事はいつも好奇心を刺激してくれるとの話が続きます。アニカさんは2022年4月からは府中観光協会に籍を置いて活動しています。

その後会場では、NHKワールドJAPANで放映された「Where We Call Home」のビデオや府中観光協会が作成したビデオが流され、その姿からアニカさんの府中愛の強さを感じることができました。これからも府中観光協会で、外国人観光客に府中の魅力を伝える活動をしていきたいとのことでした。

質疑応答の時間、ポーランド語で話しかけた来場者に、とてもうれしそうなお話されたのも魅力的でした。時々わかりにくい質問もありましたが、何に対しても一生懸命に対応する姿が感動を誘いました。

「私の日本語は、日本に来て5年だから、5歳の子と同じです」の言葉に、会場には温かい笑顔があふれました。それは、言葉を越えたハート・トゥ・ハートの素晴らしい場所でもありました。

当日は、市長をはじめ120名を

超える多くの来場者があり、盛況で温かきの溢れた講演会となりました。

(中井博子：記)

初めて実行委員を務めて 山本 肇

19年前、末娘とともに親子で「色ガラスのペンダント作り」(主催悠学の会・協賛日本科学協会)に参加したことをきっかけに、科学体験クラブ府中に加入して以降、生涯学習フェスティバルで「こどもサイエンス」などを開催してきました。

今回、初めて実行委員の立場でフェスティバルを迎えましたが、コロナ禍の中での3年ぶりのリアル開催で、人流制限や人数制限もありましたので、来場されるみなさまの期待にどの程度お応えできるか不安でした。

密を避けるためにアトリウムでのイベント開催を断念したこともあり、館内全体が以前のフェスティバルの賑いには遠く及びませんでした。が、こどもたちの笑顔と接しながら無事にフェスティバルを終えることができ今はほっとしています。

毎月の実行委員会活動が平日のため、昨年末に退職した私のような身でないとなかなか参画しづらいとは思いますが、多くの市民の方が経験されることをお勧めします。

ふちゅう東西南北

学びのテレポート 郷土の森博物館

《 府中ってスゴい 》

博物館常設展示室には江戸時代の府中ジオラマがあります。府中宿、甲州街道(現・旧甲州街道)、大國魂神社、家康が奥州を平定した秀吉をもてなした府中御殿跡などが詳細に表わされています。

現在の府中の人口は約26万人で、街並みも様変わりしていてタイムギャップを感じます。しかしながら、例えば崖線の湧き水ポイントが今、美好水遊び広場になっていること、大國魂神社北の松本屋は江戸時代に文人で賑わったことなどを知ると、現代への連続性が少し感じられ、なぜか昔の府中に親しみがわきます。

江戸ジオラマの横には、当時、色々なお触れが掲げら

れた高札場が展示されています(右写真)。府中あたりは識字率が高かったそうです。また近隣には鷹場があり、鷹の餌となる野鳥の捕獲を府中では禁じられていたのですが、その後、鷹場がなくなっても府中は野鳥禁猟を続けたそうです。やや強引かも知れませんが、食より保護という環境意識の高さ、先見性を感じました。これらより府中は当時から教育や文化の水準が高かったのでは、と推察されます。府中ってスゴい、誇らしい、と思われ、愛着が深まった次第です。(中濱敬文)



ふるさと府中歴史館で市史編さん事業をすすめる 英 太郎さん

(はなぶさ)

知れば知るほど奥が深く興味の尽きない府中の歴史。半世紀ぶりの府中市史編さん事業を、担当主幹として取り組んでいる ふるさと文化財課の英さんにお話を伺いました。



市史編さん事業とはどんな仕事ですか？

自治体史の編さんは、その地域で過去にどんなことがあったのか、人々がどんな暮らしをしていたのかなどを歴史的な資料の調査研究を行い、地域の歩みが理解できるよう、歴史書としてまとめ発刊する事業です。



発見された戦時中の偵察機の尾翼と

今回の市史編さんは半世紀ぶりに府中市の歴史をまとめる機会であり、歴史を学んできた者の一人として歴史編さんという大きな仕事に直接携われたことは、幸運なことと思っています。市史に関する貴重な資料に接したり、市民の方々から新しい情報を頂いたり、時に新たな発見に立ち会うことができたりと、毎日がドキドキするような体験をさせてもらっています。市史の編さんで大事なものは、異なる学

問分野、様々な視点や情報を整理して、地域の歴史の全体像がわかるように編さん事業全体を一つの方向に進めていくことに尽きると考えます。

歴史の興味深い点・面白味は何ですか？

誰かが言っていることや定説を無条件に信じ込むのではなく、自らの手で歴史資料を集め、その中からより確かな資料を探し出し、検証して、自分なりに考え直してみることが欠かせないと思います。歴史の定説と言われているものも所詮は誰かが考え出した見解に過ぎず、見逃されていることもあります。また、様々な解釈ができること、立場によって見え方が変わることも面白いと思います。

地域の歴史について知ること、その土地柄への理解が深められます。自分たちの地域だけでなく異なる地域や文化の間で理解がすすめば、互いの相違点、共通点を認めて尊重しあうことにもつながり、ひいては平和にも貢献することになるのでは、と思います。

府中の歴史を学ぶ、おすすめの方法は？

そうですね、府中といえばやはり大國魂神社です。武蔵国府の時代から現代まで続いてきたことの重みはすごいと思います。歴史上の人物や事件との関係など、面白そうなことを調べてみるのがいいと思います。府中市郷土の森博物館、ふるさと府中歴史館など詳しく調べられるところが、府中には多くあります。平成30年から刊行が始まった『新 府中市史』もお役に立つと思います。

市内には、武蔵国府跡の国衙跡地区や国司館地区、高安寺、

陣街道(旧鎌倉街道)など、調べて面白そうなところはいっぱいありますね。どれもお勧めです。

ご自身が、府中市の歴史において好きな時代は？

戦国時代に関東に覇を唱えた小田原北条氏の歴史に以前から強く惹かれています。初代早雲に始まる5代の当主がいずれも魅力的な人物であること、府中の歴史とも深い関係があることなどが主な理由です。

北条氏について調べていると、意外に身近な場所に関係する城郭が残っていて、訪ねてみると堀や土塁などの遺構を目にすることができます。海沿いや眺めの良い山など、風光明媚な場所に立地している史跡も少なくなく、観光という側面からも楽しめます。北条氏関係の史跡はほとんどが日帰りで行くことができる近場にあるのでよく訪れています。

北条氏は大國魂神社や高安寺と関わりが深かったことが知られており、例えば郷土かるたの「と 虎の朱印は免税状」は有名です。

府中市史の中世編にも史料が多く掲載されています。

ところで、いつ頃から歴史好きになったのですか？

幼いときから遺跡、寺社、城郭など歴史スポットや古いものが好きで大河ドラマも大好きでした。小学校の自由研究で前回(上巻昭和43年・下巻昭和49年発刊)の『府中市史』を読み、自分の郷土・府中が歴史ある町で、多くの歴史上の人物が関わっていたことを知り、府中の歴史に興味を持ちました。

中学で、府中の遺跡の発掘調査に最初に取り組んだ先生に社会科を教わり、その先生が府中市史に関わっておられたことを知りました。毎日のように直接、歴史や考古学について教えて頂くうちに、将来は歴史を勉強してみたいと強く思うようになったのです。

先生からは、本当に歴史を学びたいなら、きちんと学問として勉強し、正しい研究方法を学んで研究者を目指すようご指導いただきました。

昭和50(1975)年から府中で武蔵国府関連遺跡の発掘調査が始まり、中学、高校時代には府中のまちなかで古代の遺跡を直接目にする機会が増えました。自分が暮らす足元に古代や中世の歴史が遺跡として残っていたことに大きな衝撃を受けました。

その後府中市に入庁してから、前回の市史編さんを担当していた職場の直属の上司をはじめいろいろな人の薫陶を受けたことも、すべて現在につながっています。

市民のみなさまに伝えたいことは？

今回の市史編さん事業では、新たな発見が多数あり、半世紀前の『府中市史』を全面的にリニューアルする刊行物が市制70周年に当たる令和6年度には出来上がります。どうぞご期待ください。



『新 府中市史』(一部)

(取材：編集部／中濱・井口・中井・竹村・西谷)

ふちゅう東西南北 学びのテパート 郷土の森博物館

「郷土の森博物館」は、約 14 万平方メートルの敷地全体で府中の自然、地形、風土の特徴を表現し、その中に昔の農家や町屋、歴史的な建物などを配置することで、ふるさとの自然と歴史を知ることができます。博物館本館の常設展示場には府中の歴史・民俗・自然をテーマとした豊富な実物資料のほか、模型や映像を通じて府中を学べます。毎日 14:30 から 2 階でガイドツアーが行われ、参加されると府中をより深く知ることができます。(鈴木禎治)



郷土の森博物館 公式
キャラクター「けやじい」

★博物館本館の外で

《 母校の記憶 》

復元建物のエリアに、我が母校、府中第一小学校の校舎の一部が保存されている。この建物は最初、旧府中尋常高等小学校として、昭和 10 年に建設された。



入学準備で母に連れられ、初めてこの校舎に入ってきたのは、廊下の天井が物凄く高く、暗かったこと。現在も残る、正面玄関脇の狭い中央階段は来客用で、子どもの利用は禁止されていた。それで、今でもこの階段を使うときは、必ず誰かに注意されそうな気がする。当時の児童数は多く、1 学年 6 クラスで、1 クラス 50 人位は当たり前だった。教室の勉強机は手作りの木製で、天板は大抵反っていた。凸凹があって、鉛筆が答案用紙を突き破ることもしばしばで、下敷きは必需品だった……。あれから凡そ 60 年。時間は経っても、ここはいつも懐かしい。沢山の思い出が、あちらこちらから次々と蘇る。(竹村 稔)

《 真桑瓜「昔は御用瓜、今は江戸伝統野菜」》



真桑瓜(まくわうり)は、古くから日本で親しまれてきた野菜です。美濃国の真桑村で作られていたため地名から真桑瓜と呼ばれるようになりました。その真桑瓜を、どうして府中で栽培するようになったのか? 江戸幕府から栽培を命じられ、

今の新宿・成子坂と府中に「御用瓜」の畑を設けたのです。美濃の真桑村から栽培のやり方を詳しく教えてもらい、江戸城に「御用瓜」として献上することができたのでした。

子供の頃食べた思い出があり、味が薄く味の無いメロンのような気がします。近年は、だんだん栽培されなくなりましたが、日本の各地で「伝統野菜」の復興がすすめられるようになり、真桑瓜も今は府中の農家数人の方が栽培されています。

真夏には、郷土の森博物館前の物産館で販売されることがあるようです。(丸山まり子)

《 「県の木」が並ぶ県木園 》



園内ほぼ中央西寄りに位置する県木園。開園当初 35 の道府県から「県の木」を取り寄せたそうです。土壌や気候など条件があわず育たなかった木も沢山あ

るようですが、一度訪ねてみてください。ご自身の県木に思いを馳せてみるのもいいでしょう。8 月下旬に訪れた時は鹿児島県の県木カイコウズが赤い花を咲かせていました<右の写真>。(井口文江)



★博物館本館のガイドツアーに参加して

《 釣手土器の笑顔 》

釣手土器という全国でも発掘例の少ない土器が展示されていました。武蔵台東遺跡から出土したそれは、別名コウモリ土器と呼ばれるユーモラスな土器です。紀元前 5000 年のもので祭祀に使われました。これには小さな穴があり吊るして火種をいれ灯りとして使われたようです。電気がない時代だから祭祀は、日中に行えば良いのに灯りをつけて、わざわざ行うとは…。まるでくらやみ祭りみたいと思いました。

他に、展示の石棒等を調べてみると面白いことが分かりました。7000 年も前からこんな事があったのだと知り興味深かったです。人は今も昔も変わりませんね。



最近の縄文ブームは、今の世の中の不自由さ故にこの時代の平和や自由、大らかさに共感するのでしょうか。人の心はいつの世も変わらないとつくづく思いました。

文字の無い時代については推測しかできないので、自由に想像出来ます。釣手土器も、行って見て聞いて調べて想像して楽しんでみて下さい。土器の笑顔との対峙、お勧めですよ。(山田詩子)

《 郷土愛が目覚めるところ 》

本館の展示を見学するのは何回目だろう。今回は府中に初めて訪れた人の気分で説明を聴こうと決めた。何か今までと違った発見があるかもしれないから。

お祭りのこと、昔、府中は海だったこと、多くの土器が発掘されていること等々の説明を受けながら奈良時代のジオラマの前に来た。聞いているうちに次第に声が意識から遠ざかっていった。その代わりに子供のころの記憶がどンドン湧き上がってきた。大國魂神社の裏山(裏の杜)でのかくれんぼ、大木の並ぶ中で鬼になった時のひとりぼっちの心細さ。競馬場のハケ下に流れる清水の冷たさ、くらやみ祭りの後の何とも言えない寂しさ。半世紀以上前の思い出が余韻を残しながら消えかかると、高札場についての説明の声がはっきりと聞こえてきた。当時の庶民の識字能力の高さに感心しながらそろそろ案内の方とはお別れ。



さて、ところで何か発見はあったのだろうか。忘れていた記憶の中から、失いかけていた郷土愛が目覚めていたこと、そして、初めて府中に来た人にはなれないことを知ったこと、それは、私にとっての大きな発見だった。(中井博子)

<2 ページ下段へ>

編集後記：今回は、学びの種を探そうというテーマでお届けしました。「ふちゅう東西南北」では編集部員が郷土の森博物館での学びの体験を記事にしました。同じ日に同じところを訪れたのに、6 人 6 様、様々な視点があります。見方を変えれば学びの種はどこにもあるのですね。(西谷信昭)